



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「新渡戸稲造の米国留学時代における農学研究に関する実証的研究」 : ジョーンズ・ホプキンス大学所蔵文書の分析を中心として
Author(s)	大櫃, 敬史; OBITSU, Takashi
Citation	北海道大学大学院教育学研究科紀要, 101, 55-67
Issue Date	2007-03-30
DOI	<a href="https://doi.org/10.14943/b.edu.101.55">https://doi.org/10.14943/b.edu.101.55</a>
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/20486">https://hdl.handle.net/2115/20486</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	101_55-67.pdf



〈研究資料〉

# 「新渡戸稲造の米国留学時代における 農学研究に関する実証的研究」

—ジョンズ・ホプキンス大学所蔵文書の分析を中心として—

大 櫃 敬 史\*

## A Study of the Development Process of Agricultural economics and policy During Inazo Nitobe's Overseas Studies at the Johns Hopkins University.

Takashi OBITSU

1. はじめに
2. アメリカへの留学
  - I) 留学の動機
  - II) 佐藤昌介の特別な計らい
3. ジョンズ・ホプキンス大学大学院における新渡戸稲造の履修記録
  - I) 新渡戸稲造の履修科目の特徴—佐藤昌介との比較
  - II) 「歴史・政治学ゼミナール」の記録について
4. 「農学研究」—深遠な学理探求—への傾倒
  - I) ホートン農事試験場の存在—佐藤昌介が体験した農業実習
  - II) 佐藤昌介の「学位論文」提出
  - III) 「歴史・政治学ゼミナール」教授陣の影響
5. 「農学」の定義
6. まとめにかえて

【キーワード】新渡戸稲造, 米国留学, 農学研究, 佐藤昌介, ジョンズ・ホプキンス大学, 農学の定義

### 1. はじめに

19世紀後半, わが国に米国流近代農学を齎した二大潮流が見られた。その一つは, 初代札幌農学校教頭となってマサチューセッツ農科大学で興っていた近代農学の流れを伝播したウィリアム・S・クラークに代表される系譜である。もう一つは, ジョンズ・ホプキンス大学で当時興っていた植物学(生物学)及び動物学の研究成果<sup>1)</sup>を応用した科学的な農学研究に連な

\* 北海道大学大学院教育学研究科健康スポーツ科学講座助教授(体育計画〈体育史〉研究グループ)

る流れであった。

1884年(明治17)札幌農学校二期生新渡戸稲造は、東京帝国大学を退学して渡米、メリーランド州ボルチモアのジョンズ・ホプキンス大学に入学をした。この大学は当時全米でもいち早く本格的な大学院を創設したことでよく知られた大学であった。わずか3年間という短い期間ではあったが、とくに当大学で過ごしたアメリカ留学が、彼の生涯に決定的な影響を与えたであろうことは、もはや疑う余地はないであろう。

これまでの先行研究において、新渡戸が一体いつ頃から、どのような形で本格的に農学研究を志す事になったのかと言う疑問は依然として残されたままであった。松隈俊子は、その主著『新渡戸稲造』(みすず書房、1969)でジョンズ・ホプキンス大学留学時代の模様を「この大学で学ぶこと3年、研究した学科は、経済学、農政学、農業経済、行政、国際法、歴史学、英文学、ドイツ語等であった。」と述べている。ここでの記述は、出典が明記されていないので確かめる手立てはないが、彼自身が当大学で、農政学や農業経済を学んだとする説は、新渡戸が1885年当時、「農政学或いは農業経済を調べる積もりであったが、30年前は英米では政府が直接農業に関係する事はなかった。従って農政に当たる文字さえもなかった。」と結論づけている点からも明らかに誤りが見られる。同様に中島九郎が、『佐藤昌介』、川崎書店、1956.の中で述べた、「佐藤がこの大学でアダムス博士から農政学を、イーリー博士から農業経済を学んだ。」とする説は、明らかに事実と反していた事になる。この様にジョンズ・ホプキンス大学を含めて佐藤、新渡戸が留学をしていた頃のアメリカにおいて、農業経済学が全くと言っていい程行われていない状態であったにも関わらず、二人の新進気鋭の研究者がここで農政学と農業経済学を学んだとする説が流布された理由は、帰国後この両者が札幌農学校において、それぞれ農政学と農業経済学を担当したことによって生じた憶測に過ぎなかったと言えよう。

一方、和泉庫四郎は「札幌農学校初期における農業経済学の形成過程に関する研究」(鳥大農研報, 35, 85-95, 1983)及び「新渡戸稲造のアメリカ留学と農政学研究」(鳥大農研報, 38, 82-91, 1985)において、先述した諸論に対して異論を唱え、ジョンズ・ホプキンス大学に現存する新渡戸関係資料に基づいて、彼の在学当時の履習の実態を詳しく検討している。彼の留学当時は未だアメリカにおいて農業経済学の研究は着手されておらず、専ら歴史・政治学ゼミに所属して関連科目を中心に履修し、指導教授から与えられたテーマである「日米関係史」を修士論文として取り纏め、その後独逸に留学して本格的に農業経済学を自らのテーマに設定した点を指摘した。新渡戸の米国留学時代における農学研究の発起をめぐる問題が、如何なる事由によって、この様な二つの異なる見解を生じる結果になったのか、以下に述べる筆者の問題関心に従って、再検討を試みたいと思う。

本研究では、①1884年10月から1887年5月にかけてジョンズ・ホプキンス大学に入学した新渡戸と1年前すでに同大学に留学を果たし、あらゆる面に渡って影響力を持った同郷(盛岡)の先輩佐藤昌介の二人についての学習活動に注目する。従来の先行研究ではほとんど取り上げてこなかった彼等の米国大学留学時代の活動と思想の軌跡を辿り、この時期の学問的関心とその後の彼等の農学研究への方向づけに如何に多大なインパクトを与えていったかを知る手がかりとする。②合わせて当時ジョンズ・ホプキンス大学を取りまく教育・研究環境下において、すでに新たな動きを見せていた近代農学へのあゆみにも注目しつつ、以下の点も視野に入れて検討を進めて行く。

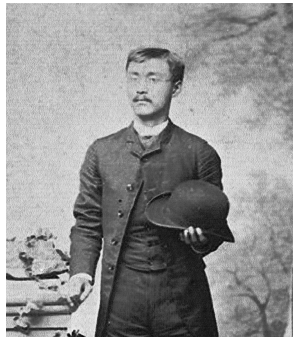


図1 米国留学当時の新渡戸稲造

- I) ジョーンズ・ホプキンス大学における大学院教育構想（設立目的、「歴史・政治学ゼミ」教授陣、ゼミナール方式）の特徴,
- II) 初期の農事試験場構想,
- III) ジョーンズ・ホプキンス大学における植物学、動物学の研究成果を応用した科学的な農学研究への流れ,
- IV) ハーバード大学の自然科学（地質学・生物学分野）とマサチューセッツ農科大学農学科（W・S・クラークの農学研究）との相互関係について,

これらはほとんどが当大学に所蔵されている文書によって分析が可能である。筆者はこれまで、二度に渡って当大学を訪問し、所蔵されている資料の全体をすでに調査を終えている。その主なものは、新渡戸自身による入学志願書、講義受講カード、学業成績（Academic Record）に始まり、学長・教授に宛てた書簡、大学院の講義・演習内容を留めた歴史・政治学ゼミ記録<sup>2)</sup>等先に取り上げた諸課題を明らかにするに足る十分豊富な資料が蓄積されている。筆者は2006年2月に、今回で三度目の大学訪問を行い、主にミルトン・S・アイゼンハワー図書館、同大学フェルドナンド・ハンバーガー特別資料室において集中的に資料収集を行った。更に新渡戸の足跡を辿りながら、フィラデルフィア近郊のペンシルヴァニア州立図書館及びフレンドセンターキューカー図書館等を訪問し、これらに関連する資料収集を行った。そこで得られた資料を駆使して、この時期の新渡戸研究の前進を語ることを主なねらいとしている。

## 2. アメリカへの留学

### I) 留学の動機

新渡戸稲造がペンシルヴァニア州ミートビルを訪れるきっかけとなったのは、札幌で最初に洗礼を受けたメソジスト派の宣教師メリマン・C・ハリスの勧めによるものであった。ハリスはオハイオ州の出身で、1873年（明治6）夫人を伴ってわが国を訪問し、函館を中心に布教活動を行っていた。当初新渡戸は夫人の母校であるアレゲニー大学への留学を予定していた。ハリス夫人が米国に帰国を果たしたのを確認の後、彼女を頼って渡米することとなった。ハリス夫妻は新渡戸の渡米を多に歓迎し、到着当日さっそく彼を伴ってアレゲニー大学を訪れ、直に学長に紹介した。即座に入学を許可された新渡戸は、翌日からさっそく大学の講義に出席をすることになった。ドイツ語、哲学史、演説法などが実際に受講予定科目に組まれていた。

## II) 佐藤昌介の特別な計らい

新渡戸が留学を果たした米国最初の地、ペンシルヴァニア州ミートビルにはわずか二週間足らずしか滞在しなかった。その理由は、メリーランド州ボルチモアのジョンズ・ホプキンス大学に一年前から留学をしていた先輩佐藤昌介の存在があった。佐藤は彼が米国に滞在していることを知るや、直ちにボルチモアに来ることを熱心に勧めた。度々の佐藤の熱心な誘いに応じて、彼はボルチモア行きを決心することになった。

### 3. ジョンズ・ホプキンス大学大学院における新渡戸稲造の履修記録

#### I) 新渡戸稲造の履修科目の特徴—佐藤昌介との比較

札幌農学校出身の佐藤昌介と新渡戸稲造が相次いで留学をした1880年代のジョンズ・ホプキンス大学<sup>3)</sup>は、当時のカリキュラム上から見る限り数学、物理学、化学、生物学等の理学系を中心にしてギリシャ・ラテン語、ロマン語系言語、ドイツ語、フランス語、英語等の語学系、歴史・政治学及び哲学系の三系統から成り立つ文理科大学であった。初代学長のダニエル・C・ギルマンの教育方針もあって1880年前後の米国大学教育にドイツ的アカデミズムが積極的に導入されていった。日本からの二人の留学生が在籍した政治、経済、歴史部門においては、ドイツ仕込みの新進気鋭の研究者であるハーバード・B・アダムスやリチャード・T・イーリーがいて、牛耳を執り学生を熱心に指導した結果、全米各地から更に大学院に入って学位を取得すべく多くの秀才が集った。殊に有給研究生には年額500ドルの奨学金が給付されるという充実した奨学金制度が存在したので益々こうした傾向に拍車をかける結果となった。

1884年10月から3年間、新渡戸稲造が入学をしたジョンズ・ホプキンス大学には幸いにも彼の在籍中、当時の履修状況を記したサーキュラー(The Johns Hopkins University Circulars)<sup>4)</sup>が現存している。この記録を手がかりに、当時の開講科目・形態・時間・場所、担当教授等を取り上げることが可能である。その際この大学に1年前にすでに入学を許可され、歴史・政治学ゼミに所属して研究活動に従事していた先輩研究者である佐藤昌介の存在を見逃すことはできない。奇しくも同じ大学の同じゼミで学ぶ間柄となった両者の履修状況を比較検討しながら、各々の履修科目の特徴を見ていくことにする。

表1の両者の科目履修一覧からも明らかな様に、この二人はほぼ同様な科目選択をしていたことがわかる。二人の特徴的な点を取り上げるならば、佐藤は自身の学位論文の対象でもあるアメリカ史を選択し、それ以外に教育学にも深い関心を示していたことが指摘される。更に外国語の履修に関しては、ドイツ語及びフランス語を選択し、両方ともに会話に力を注いでいたことが記録に残されている。一方新渡戸の履修科目の特徴は、教会史を初めとして、特にヨーロッパに問題関心の中心を据え、歴史学の基礎にも十分注意を払っていたことが窺える。外国語履修に関しては、主にドイツ語の読解力に力点を注いでいた点が特徴として挙げられる。

#### II) 「歴史・政治学ゼミナール」の記録について

当時の学長であったギルマンは、歴史・政治学科の主任教授としてドイツから大物教授を招く計画を目論んでいたが、本命の人物に断われたためこの計画はあえなく頓挫する。その結果として当学科は柱となる教授を欠いたままの状態で、ハーバード・B・アダムス(准教授、政治学ph.D)を責任者とし、リチャード・T・イーリー(講師、経済学ph.D)とジョン・F・

		新渡戸稲造の場合	佐藤昌介の場合
1883年	前期 (No. 27)		歴・政ゼミ (アダムス、週 1、金、8~10pm、Bluntschli Library)、アメリカ史 (アダムス、週 1、木、12、Bluntschli Library)、国際法 (アダムス、週 3、月火水、12、Bluntschli Library)、上級経済学 (イーリ、週 3、月水金、4、Bluntschli Library)
	後期 (No. 29)		歴・政ゼミ (同上)、アメリカ史 (同上)、国際法とヨーロッパ政治論 (アダムス、週 3、月水金、12)、上級経済学 (同上)、教育学 (ホール、週 1、土、10、Chemical Lecture Room)
1884年	前期 (No. 34)	歴・政ゼミ (アダムス、週 1、金、8pm)、教会史 (アダムス、週 2、月火、11)、政治史 (アダムス、週 3、水木金、10)、貨幣・銀行・財政・商業論 (イーリ、週 3、水木金、12)	歴・政ゼミ (同上)、政治史 (アダムス、週 3、水木金、10)、貨幣・銀行・財政・商業論 (イーリ、週 3、水木金、12)、国家論 (モリス、週 1、水、4)、ドイツ語作文 (ヘンベル、週 1、木、11)、ドイツ語購読 I (ヘンベル、週 2、月水、11)、ドイツ語購読 II (ヘンベル、ウッド、週 1、金、11)、フランス語会話 (フォンテーネ、週 5、月~金、3)、弁論 (月~金、ウッドワース、9 a m~2 p m)
	後期 (No. 39)	歴・政ゼミ (同上)、政治史 (同上)、ルネッサンス論 (アダムス、週 2、月火、11)、財政・行政論 (イーリ、週 3、水木金、12)、経済学説史 (イーリ、週 5、月~金、10)、ドイツ語購読 (ヘンベル、週 2、火水または金、3)	歴・政ゼミ (同上)、政治史 (同上)、財政・行政論 (イーリ、週 3、水木金、12)、教育学 (ホール、週 1、木、9)
1885年	前期 (No. 44)	歴・政ゼミ (同上)、政治史 (アダムス、週 2、水木、11)、国際法 (アダムス、週 2、月火、12)、上級経済学 (イーリ、週 2、水木、10)、ドイツ語購読 (ヘンベル、週 1、月、11)、ドイツ語購読 (ゲーベル、週 2、火金、11)	歴・政ゼミ (アダムス、週 2 時間、金、8~10 p m)、政治史 (アダムス、週 2、水木、11)、上級経済学 (イーリ、週 2、水木、10)、ドイツ語会話 (ゲーベル、週 5、月~金、9)
	後期 (No. 47)	歴・政ゼミ (同上)、政治史 (同上)、国際法 (同上)、行政論 (イーリ、週 1、金、10)、上級経済学 (イーリ、週 3 火水木、10)	歴・政ゼミ (同上)、政治史 (アダムス、週 2、水木、11)、行政論 (イーリ、週 1、金、10)、上級経済学 (イーリ、週 3、火水木、10)
1886年	前期 (No. 52)	歴・政ゼミ (アダムス、週 1、金、8~10 p m、Bluntschli Library)、ゲルマン制度論 (アダムス、週 2、水木、10)、財政論 (イーリ、週 3、水木金、11)、歴史批判論 (ジェームソン、週 1、金、9)、弁論 (ウッドワース、週 5、月~金、9~10pm、ホプキンスホール)	
	後期 (No. 56)	歴・政ゼミ (同上)、ゲルマン制度論 (同上)、財政論 (同上)、弁論 (同上)	

表 1 新渡戸稲造と佐藤昌介の科目履修一覧  
(ジョンズ・ホプキンス大学大学院)

- ※ 1. ( ) 内、番号はサーキュラー収録巻数を示す。
- 2. 傍線は、両者の共通履修科目を指す。

ジェームソン (講師, p.h.D) の二人を補佐役として学科運営に当たらせていた。

○歴史・政治学ゼミナール<sup>5)</sup>

受講対象は大学院生。ゼミナールの主任教授はアダムスが務め、イーリー、ジェームソンの二名がこれを補佐した。毎週一回金曜日の午後8:00から10:00までの二時間がこれに当てられた。

試験は3名の教員に加えて、招待される講師が、質問と筆記の形式で適宜、実施された。次年度のゼミナールは、歴史・政治学科所属の3名の教員と報告を義務付けられた学生とが協力

して主に以下の3分野の研究を進める。1)アメリカの行政組織の特徴を明らかにする。(アダムス担当) 2)ヨーロッパ諸国におけるアメリカ経済学の歴史を経済学の発展史, アメリカの粗税制度・経済組織の歴史と関連させながら研究する。(イーリー担当) 3)代表的な州の憲法を歴史との関連において特徴づける。(ジェームソン担当)

Year	Teachers	Total Enrolled Students	Graduate Students including Fellows	Mati- culates	Special Students	Degree Conferred	
						A.B.	Ph.D
1880—81	39	176	102	37	37	12	9
1881—82	43	175	99	45	31	15	9
1882—83	41	204	125	49	30	10	6
1883—84	49	249	159	53	37	23	15
1884—85	52	290	174	69	47	9	13
1885—86	49	314	184	96	34	31	17
1886—87	51	378	228	108	42	24	20
1887—88	57	420	231	127	62	34	27
1888—89	55	394	216	129	49	36	20
1889—90	58	404	229	130	45	37	33

表2 Enrolment (1880—1890, Johns Hopkins University)

#### ○政治史

今世紀初頭以後のヨーロッパ諸国の比較政治史, 古代ヨーロッパにおける社会制度, 一般政治史に関する二～三の見解。週3回, 受講対象は大学院生及法律専攻の学生。使用テキストは, プラトン『共和国』, アリストテレス『政治学』他。(アダムス担当)

#### ○財政・金融論

財政, 貨幣, 銀行業の一般原理を講述, アメリカ合衆国の財政史の概要に触れながら州, 都市の租税に係わる特有の諸問題について論及。(イーリー担当)

以上見てきた様にアダムスが主任教授となって以降一年の前・後期を通して, 定例の金曜日開催された歴史・政治学ゼミナールは年々その評判を高め, 1885年前後の段階では, すでにその存在は国の内外に広く知られるまでになっていた。

### 4. 「農学研究」—深遠な学理探究—への傾倒

この箇所では, 佐藤, 新渡戸の両者がアメリカに留学した時期に直接的, 間接的に農学研究に傾倒していく際の, 契機となった原因と見做される事象について取り上げ検討していく。

#### I) ホートン農事試験場の存在—佐藤昌介が体験した農業実習

1882年8月, 佐藤昌介はアメリカ留学のため, 日本を出発した。当初ニューヨーク州マウンテンヴィルのホートン農場へ立ち寄り翌年までここに滞在しながら乳製品製造の実習に従事

して留学費用を貯える計画であった。ここでミッチリと農業の実際を学んだ。この農場に入る事になったのは、エドウィン・ダンの力添えと、アメリカ農務省の紹介とであった。彼は1883年3月15日、ジョンズ・ホプキンス大学学長B.C.ギルマン宛てに書簡を送っている。当大学に入学する目的はあくまでも化学を専攻することであるが特に農業の面からこの専攻を希望していること、すなわち学士号の取得に加えて乳製品製造という実務経験も活かして更に勉学に励みたいという強い意志を表わし、この二つを同時にアピールして学長からの入学の許可を待った。佐藤がホートン農場でちょうど実習を行っていた時期、社会福音運動の有力な推進者であり、かつて『クリスチャン・ユニオン』誌編集者ライマン・アボットに出会った。彼は佐藤がジョンズ・ホプキンス大学に入学を希望していることを知るや、当時この雑誌（同前、第26号）に掲載されていたリヤード・T・イーリーの論文「ジョンズ・ホプキンス大学論」を読むように熱心に勧めた。これがきっかけとなって、後の歴史・政治学ゼミナールにおける新しい師弟関係が構築される要因ともなった。また札幌農学校教授であったD.P.ペンハローが日本から帰国後一時、ホートン農場で植物学研究主任として研究に従事していたことも非常に好都合であった。この農場は「農業上の諸問題を科学的に研究することを目的として」設立され、当時「私立の農事試験場として米国で最初のもの」<sup>6)</sup>と云われる存在であった。この様に当大学を取りまく教育・研究環境下において、すでに近代農学に関わる新たな動きが形成されていたことになる。（傍線：筆者）

## II) 佐藤昌介の「学位論文」提出

1885年11月、ジョンズ・ホプキンス大学で2年目を迎えていた新渡戸は、札幌の宮部金吾<sup>7)</sup>宛てに以下の様な近況報告を認めた書簡を送っている。

「…僕は次の様に自問する。〈札幌にもこうした学校を作れないであろうか〉と。…これらの他に、土地問題（agrarian administration—農政）の研究に多くの時間を当てている。どの科目にも増して、アグラリアン・エコノミーに重点をおき、それにより多くの時間を費やしているというのが、僕の今日このごろです。」（1885年11月13日付新渡戸稲造より宮部金吾宛書簡<sup>8)</sup>）（傍線：筆者）

この書簡から1885年当時、歴史・政治学ゼミナールでの演習の実態が明らかにされている。ゼミ記録によれば、取り上げられたテーマはタウン・ミーティング、地方組織体、土地制度の発展を跡づける制度史等を指して述べたものと見做される。因に佐藤は、この時、当大学において留学最終の年を迎えていた。

1886年歴史・政治学ゼミでは9名の大学院生が博士論文を提出している。この中に注目すべき2名が含まれていた。そのうちの一人が佐藤昌介であった。彼は3年間の研究成果を「アメリカ合衆国における土地問題の歴史」というテーマで纏め上げている。他のもう一人が、後の第28代アメリカ大統領となったトーマス・W・ウィルソンであり「議会政府論—アメリカ政治の研究」で博士号を取得している。こうしたこの時期の佐藤による研究成果の発表は、少なからず同郷の後輩であり、札幌農学校の新進気鋭の研究者として世に名を馳せていた新渡戸にとっては、強い関心を引く結果となった。これにより彼の農学研究に対する郷愁は一段と高まる結果となったことはまず疑う余地はないであろう。またこの間、当ゼミのテーマでもしばしば取り上げられ、佐藤が自らのテーマとしたアメリカの土地問題を歴史的視点でしっかり捉えるという研究手法は、後に新渡戸が農学研究に携わる際にも十分応用しうるものであり、こ

ここで培った研究体験は今後彼が新しい学問と取り組む際の貴重な財産となった。

### Ⅲ) 「歴史・政治学ゼミナール」教授陣の影響

3節のⅠ) 及びⅡ) ですでに取り上げた様に、歴史・政治学ゼミナールにはドイツ留学で研鑽を積んだ二名に母校出身の一名を加えた三名の優秀な教授陣が在籍していた。日本からこの大学に留学をした佐藤、新渡戸の両名もこのゼミナール所属の教授たちから多大な影響を受けることになった。以下に留学生と教授たちの親密な係わりについて触れておく。

#### a. ハーバード・D・アダムス (1850-1901)

アダムスはアマースト大学、コロンビア大学の両大学を卒業した後、ドイツのハイデルベルク大学において政治学のPh.Dを取得した。彼はアマースト大学時代にJ. H. シーリー (後に学長となった) 教授の歴史哲学に強い影響を受けた教え子であり、二人は師弟関係にあった。また彼とW. S. クラークとは同僚の間柄にあった。彼は1876年に当大学に招かれ、以後1901年に亡くなるまでの間、歴史学を担当した。1891年に歴史・政治学ゼミナールの主任教授となった。

新渡戸が大学院2年目を迎えた1886年1～6月にかけて、学期の大半を病気のため静養生活を送っていた時期、フィラデルフィア郊外からアダムスに宛てた4通の書簡<sup>9)</sup>が大学の附属図書館に所蔵されている。それらの書簡によれば、

##### ① 1886年4月23日付書簡

もっか病氣静養のため、フィラデルフィア郊外で日々を過ごしている。2週間程度で回復の兆しあり。回復後は直ちに研究に復帰の見込みである。

##### ② 1886年6月22日付書簡

(アダムス) 先生から依頼された仕事もこなし、短時間ではあるが自習もきちんと励行している。特に先生から与えられた課題に対しては、多いに関心が湧きつつあり、関連資料の入手も殊の外進んでいる。

##### ③ 1886年7月29日付書簡

私が目下手がけているアメリカ研究を急いで仕上げたいという気持ちよりも、経済的な条件が許せば、数年滞在してじっくり完成させたいと考えている。しかし現状は健康を害し、経済的にも厳しい状況にある自分にとってはそれを希望しても、到底不可能な状態にある。

以上の様に、病氣療養中の辛い心境を率直に恩師に訴えていたことがわかる。新渡戸は恩師アダムスから与えられたテーマである「日米関係史」を5章立てで完成させる予定であると報告した記録が残っている。彼がゼミ報告日に提示したこの構成は、3年半後に出版される『日米関係史—歴史的素描』の構成となってそのまま引き継がれることになる。つまり結果的にみて、このゼミ報告の時点でかなり具体性のある、完成度の高い内容を含むものとして準備されていたことになる。

#### b. リーチャド・T・イーリー (1854-1943)

イーリーはアダムスとほぼ同様なコースを歩み、アマースト大学、コロンビア大学の両大学を卒業の後、ハイデルベルク大学において経済学のPh.Dを修めている。彼は1881年に当大学にインストラクターとして招聘されている。翌1882年に講師に昇任。その後助教授に昇任したのは1886年5月であったことから、留学中の佐藤や新渡戸がイーリーから経済学を学ん

だのはちょうどこの時期にあたっていた。1881年から1886年にかけてイーリーは、アメリカの社会問題，社会思想，社会主義等に関する多くの論文を精力的に発表し，学内において高い評価を得ると共に学界における確固たる地位を築きつつあった。当時の模様は直接イーリーの講義を聞いた新渡戸が次の様に証言している。

「マルクスの話しを私が初めて聞いたのは，ジョンズ・ホプキンス大学のイーリー先生からであった。その頃イーリーという人はアメリカの社会問題，ことに社会思想，社会主義の最高のオーソリティであった。そこで，私のいた大学ではイーリー先生の講義が毎年あって，その題は社会主義論というのであった。」<sup>10)</sup>

イーリーの講義をほぼ同時期に聞いた佐藤と新渡戸であったが，彼に対する評価は両者で全く異なっていたと見做される。新渡戸は佐藤と大学院で同級生であったウィルソンの影響を強く受け，イーリーの経済学は独創性に欠けるという批判的な立場を取っていた。一方佐藤は，帰国後イーリー著『経済学入門』の翻訳版を出版する許可を得るために直接彼宛に送った書簡や本書の「序」に見られる様に執筆したものを見る限り，イーリーの影響を強く受けていて，彼の思想を反映する箇所を数多く認めることができる。

c. ジョン・F・ジェームソン (1859-1937)

ジェームソンはゼミの教授陣の中で唯一母校の出身者であった。学部から大学院にそのまま在籍し，Ph.Dを取得した人物である。当ゼミナールでは先の二人の補佐役を務めていた。アダムスからの依頼もあって日本から来た佐藤，新渡戸の二人と同じ下宿（ボルチモア・マッカーロー通り4番地，ジェームソン講師同宿）で寝食を共にしながら二人の研究を側面から援助した。

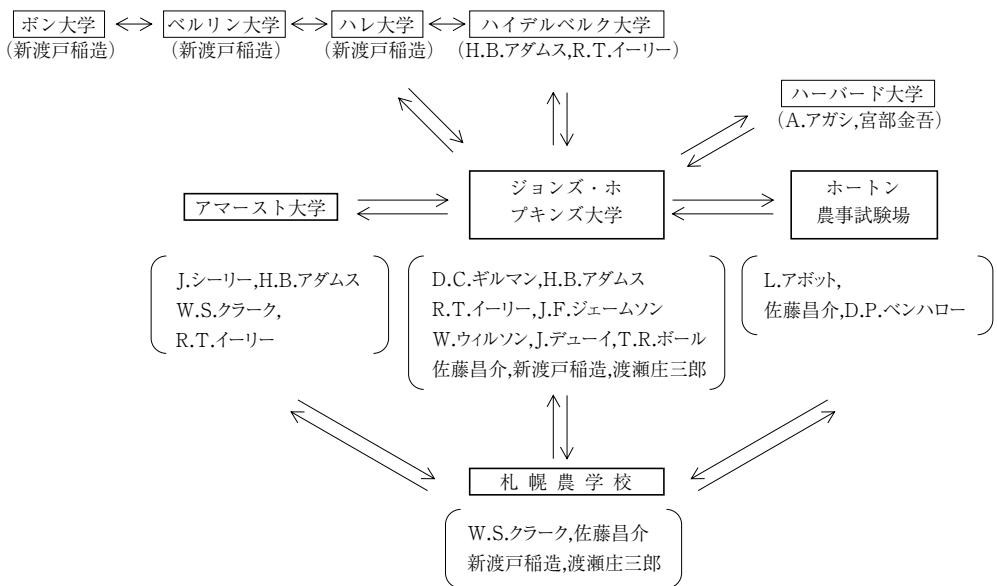


図2 J. H. 大学をめぐる関係図

## 5. 「農学」の定義

ここでは、新渡戸の近代農学に関する基本的な考え方が強く打ち出されている論文が、新たに発掘されたので、それを主な手がかりとして検討を進める。

新渡戸は、『学芸会雑誌』、第二十号（明治二十九年）、第二十二号（明治三十年）、第二十三号（明治三十年）の三回に渡って、「農之定義」其一、二<sup>11)</sup>及び「農学の範囲」と題する論文を掲載し、以下の様に農学を定義している。ここでは直接関連すると見做される第二十三号（明治三十年）「農学の範囲」を取り上げて詳しく見ていくことにする。

「農学が科学としての位置を占める様になってからまだ日が浅く、その研究方法は十分に確立されたとはいえない状況にある。科学の立場から農学を説く者は、農学は科学の力によって成り立つものであって、応用科学として何か利用できるものが存在すると言えるのか。植物学者は、農学の大部分は植物学（植物栽培）より成り立っていて、誰も非難すべきところはない。経済学者は、農学は経済学が成り立つ必要な部分であり、これを経済学の領域に入れることは、（誰も）批判の余地がない。この様な状態では一向に議論が纏らない。この様な状態に陥っていることは、農学の領域がはっきりせずあやふやな状況のまま存在しているからである。」新渡戸は、当時の農学の現状を以上の様に指摘している。

次に農学の範囲を規定しようとすれば、「まず第一に農学の目的、精神を定めることが大切である」としている。「動物学、地質学、理化学、気象学その他諸々の学問における農学は、これら科学以外の真理を探り、攻究するものであって決してこれらに使われ従属するものではない。どうなっても平然として、独立した科学の旗印を南風に翻しているべきである。」と明確な立場を表明している。（傍線：筆者）

更に農学とその他の学問領域の関係を図解した上で、その図について説明を行っている。

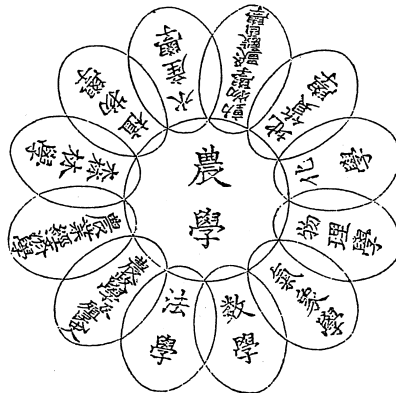


図3 農学の範囲

「周囲にある小さい輪は、種々の学問を示しており、中央の大きな輪は農学を示している。この様に農学は各学科の一部を取り入れて成立しているものである。動物学を例に取れば、農学に属す動物は、牛、馬、羊、豚、犬、鶏等の家畜動物と草木を害する昆虫である。現今、

世界に知られている動物は、極めて大きい数4万種ほどになるが家畜と呼べるものは、わずかに50種に満たない。植物と言え、その種類12～14万種ほどである。これを利用して農産と称するものは、わずかに300余種である。その他経済学、政治学、法理学、理化学等農業に直接関わるものは皆その一部分に過ぎない。(中略)

農学はその他の学問と異なりその学理を活かすことを最優先せず、実際の利益を挙げることを目的として含み持っていて、学問と実業は、その目的、方法を異にするにも関わらず、この二つの者を同時に成就することを望む。しばしば論理的に事実、真理を統一することはかなわない。」 (傍線：筆者)

新渡戸が、留学を終えて帰国し、1891年(明治24)札幌農学校で再び教壇に立って6年を経過した時期、農学博士の学位が授与される直前に発表した論文である。その内容は、学として歩み始めて間もない段階の農学の有り様を、アメリカで培った自らの研究(実)体験を踏まえたそのままの形で端的に表現したものであった。

## 6. まとめにかえて

これまで見てきた様に、1884年10月から3年間、新渡戸稲造が入学したジョンズ・ホプキンス大学における大学院の履修科目を検討した結果、明らかに講義科目としての農政学及び農業経済学の講義は未だ開講されていないことが判明した。しかし歴史・政治学ゼミナールにおいては、土地制度の発展を跡付ける制度史がテーマに取り上げられていたり、佐藤昌介が博士学位請求論文を取得する際のテーマに「アメリカ合衆国における土地問題の歴史」を掲げていたこと等からわかる様に、すでに当ゼミナールにあっては土地問題に関する研究を教授指導の下に、歴史学、経済学、法学的な視点で、学生自ら研究し、発表・討論などが活発に推し進められていたことが明らかになった。つまり結果として、「歴史・政治学ゼミナール」においては、ゼミナール(演習)方式による農政学及び農業経済学は、この時点ですでに展開されていたことになる。

後年、新渡戸が「農学の範囲」と題する論文(『学会雑誌』、第二十三号、明治30年)で述べた様に、法学、農政学及殖民主義、農業経済学は農学を形成する一領域として位置づけられたものであり、決してこれらに使われ従属するものではないことを重ねて強調していた。

彼がジョンズ・ホプキンス大学で過ごした大学院時代は近代農学の研究手法や専門領域の基礎を徹底して習得した研究者としての力量を形成する準備期間であったと云えよう。これらは後に米国を経て次に留学をしたドイツでの本格的な農学研究に携わる際にも十分応用しうるものであり、確実にここで培った研究体験は、貴重な財産になっていったと考えられる。

今回資料の制約もあって取り上げることができなかった問題点と新たに提起された諸課題が以下の通り、認められた。

- 1) 新渡戸がボン、ベルリン、ハレ大学において、具体的に何を学んだかを詳しく検討する。
- 2) ジョンズ・ホプキンス大学が誕生して10年前後経過した段階において、アメリカ農務省が日本絡みの農業をどの様に捉えていたかを「米国農務省年報」に基づいて、詳しく分析を行う。
- 3) マサチューセッツ州及びメリーランド州の「農務局年報」を比較検討し、当時の農学研究の到達点を詳しく分析することが必要である。

- 4) ジョンズ・ホプキンス大学の関連科目(植物学・動物学等)カタログの点検と文・理学系(含むチェサピーク動物学研究所)の研究連携の検討が必要である。  
今更明らかなにすることが出来なかった問題点については、今後の課題としたい。

(本研究は、2005年度クラーク記念財団 新渡戸基金研究助成、「新渡戸稲造の米国留学時代における農学研究に関する実証的研究」の研究成果の一部をまとめたものである。資料を提供して頂いたジョンズ・ホプキンス大学図書館、同大学文書館の御厚意に心からお礼を申し上げます。)

## 註

- 1) 佐藤昌介「新渡戸稲造博士を追憶して」、中央公論、p227,1933.  
当時のジョンズ・ホプキンス大学について、次の様に述べている。  
「このジョンズ・ホプキンス大学は米国においては千八百七十六年、即ち明治九年に新設せられた大学でありましたけれども、その名声は古参大学を凌ぐものがありました。物理学の大家ローランド博士が居りまして、光学において新研究を発表し、又た動物学においてはブルックス博士が牡蠣の繁殖に関して新研究を発表して、共に当時の学界を驚かせたものでありました。……(略)」
- 2) “Records of the Historical and Political Science Association and of the Seminary of History and Politics.” vol. 1
- 3) Hugh Hawkins : “Pioneer — a History of the Johns Hopkins University, 1874-1899.” Cornell University Press. 1960.  
佐藤全弘『現代における新渡戸稲造』, 教文社, p 210, 1988. 当大学を「創造的自然、社会科学とその実際の応用とを唯一窮極の目的として設立された大学院中心の新興大学であった。」と性格づけている(古矢旬「ボルチモアの新渡戸稲造」)(傍線:筆者)
- 4) “Johns Hopkins University Circulars.” Old Series. No.34-59. Nov, 1884-Aug.1887.
- 5) 佐藤前掲書, p211-212. 当ゼミナールは「学問研究の聖域なるホプキンスにあってなおひととき異彩を放つ研究集団であった。すべての参加者が教授学生の別なく別箇の研究テーマを持ち、交互に成果を報告し批判し合うというこのセミナーの運営方式は、従来の講義中心のアメリカ高等教育に対する大きな改革を意味していた。いわんや西欧の模型の模倣こそが学芸の主目的とされた明治日本からの学生にとり、この方式がまことに目新しく写ったであろうことは容易に想像できる。学問の前の平等、研究における独創性の意味、討論や相互批判の重要性等太田がこのセミナーの方式から学び得たことは決して少なくなかったと思われる。」と評している。(古矢 前掲)(傍線:筆者)
- 6) 渡辺正雄『お雇い米国人科学教師』講談社, p 351, 1975.
- 7) 宮部金吾は、1886年7月植物学、樹木及び海藻類等研究の為、ハーバード大学に留学。1886年9月ボルチモアの新渡戸下宿に三日間滞在した。(新渡戸 略年譜より作成)
- 8) 鳥居清治編訳『新渡戸稲造の手紙』, 北大図書刊行会, p24, 1976.
- 9) “Inazo Nitobe's Letters to Herbert B. Adams.” in H. B. Adams Papers. J H U M. S. Eisenhower Library.1886.
- 10) 新渡戸稲造『内観外望』教文社, 全集第六巻, p 235.
- 11) 『学芸雑誌』第二十号(明治二十九年)「農の定義 其一」には、第一 農なる文字の解釈について述べられている。  
『学芸雑誌』第二十二号(明治三十年)「農之定義 (其二)」では、第二 農業之定義 第三 農学之定義について触れている。  
「農学の定義は動もすれば廣きに失し然らざれば狭きに過ぎ一言以て之を蔽ふこと他の學問に比すれば更に難事に屬す何となれば農を以て一の獨立科學となすことは之を認定せざる邦國すらあり又認定せる國に於

でも其認定以來僅かに五十年の星霜に滿たず又農學を組織する原素多きか故に錯雜を極むるを甚しく動植物は言ふに及はず化學，物理學，地質學，天文學，經濟學，法律學其他農業に直接關係あるもの夥し其何れに重きを置くべきやは一定せず恐らくは其國狀によりて差異あるなるべし如之農學の沿革を按するに其出處頗る多般なるが如し例へは英國に於ては化學及び植物學より漸次農學に意を注ぎ農學の基礎を形成せるものの如く獨逸に於ても亦同じ尚官有地經營の意は大に農をして學理的ならしめたり又本邦の如き近年までの農書を繙くに殆んど學の字を用ゆるものあるを見ず」……（略）……「農學をして不覇獨立の専門學科となさんと欲せば第一着に其志向（Object）を一定し後に題目（Subject-matter）を講すべし志向定まらざる以上は題目徒らに繁多に涉り合理的に布置彙類するを得ず志向は定義の中に含まむれども題目は範圍を説くに當たりて論すべし」

## 参考文献

1. 佐々木篁『アメリカの新渡戸稲造』，「太平洋の橋」取材記，岩手放送IBC，昭和60年
2. Nitobe Inazo “Reminiscences of childhood in the early days of modern Japan”. With Intro. and comments by Mary Patterson Elkinton Nitobe. Tokyo. 1934.
3. 和泉庫四郎『農業経済学の形成過程に関する研究』—佐藤昌介の場合を中心とする—昭和57年度科学研究補助金研究成果報告書，昭和58年

先行研究の課題設定と筆者の問題関心が非常に似通っていた為に，今回の研究を進めるにあたり，本稿からは多くの示唆を受けた。記して感謝を申し上げます。